

絵具に問う

2019年度活動報告

絵画を彩る絵具は、画家が描いた痕跡であり、絵具から画家の表現の意図、画家がおかれていた状況などを読み解くことができる。保存修復専攻における絵画作品の研究調査では、画面の細部に関する画像や自然科学的な手法によるデータを多く得ている。特に修理に伴った調査では、作品を解体した際に限って得ることができる支持体の裏側のデータなども得られる。これらのデータは絵画の保存や研究をする上で価値のある資料と考えられるが、そのすべてを公開する仕組みがなく、専攻でアーカイブする体制も整っていない状況があった。そこで、本プロジェクトは絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関するデータのアーカイブを目指す。

プロジェクトの始動の年度であった本年度は、専攻の教員や学生が行った調査を専攻で把握し、教員や学生が調査データを専攻に提出する仕組みを構築することを目標とし、修士課程の保存科学・修理実習における作品調査、本学芸術資料館の所蔵作品の調査のデータを対象にした。具体的な検討は、川下理恵氏、紀芝蓮氏、棚橋映水氏、高林弘実によるワーキングチームを発足して行った。検討を踏まえ、教員・学生に調査申請書・報告書を提出してもらうことによって専攻が調査の実施を把握し、申請書・報告書を保管することによって調査の記録を残すことにした。申請書・報告書についてはフォーマットを作成することとし、媒体は長期間の保管が簡単な紙とし、記入・管理の便を考え、共にA4・1枚とすることにした。申請書については、調査目的・対象・方法を書き、学生は教員に提出することにした。報告書については、修理の過程で得られるデータについては棚橋氏を中心に、自然科学的調査で得られたデータについては紀氏を中心にフォーマットを検討した。12月に専攻内にデータの提出への協力を依頼し、データを提出してもらった。提出されたデータについて確認を行い、今回の試みで明らかになった今後の課題について川下氏を中心に明らかにした。これを踏まえ、より効率的な運用となるように改善を図る予定である。

高林弘実（美術学部准教授）